

## ゆうゆうインタビュー

# 217 坂田明さん

(ジャズ・サクソフォーン奏者)

サククス一本を持って二十四歳で上京。二十七歳で「山下洋輔トリオ」のメンバーとなり、激しいサククス演奏で知られるようになった坂田明さん。七十八歳になる現在もさまざまなユニットで演奏活動を続けながら、国内外のミュージシャンとフリー・セッションを行っています。ミジンコ研究者としても知られています。二〇〇三年には長年にわたるミジンコの研究普及活動に対し、日本プランクトン学会より特別表彰。音楽とミジンコはどこで結びついたのでしょうか?…埼玉県蕨市のご自宅でお話をうかがいました。

### 海が遊び場だった少年時代

—コロナが落ち着いてライブ活動もお忙しそうですね。活動中のユニットの一つ「坂田明COCODA」が演奏する「ひまわり」を聴きました。坂田さんのサククス、ピアノの大森菜々さんの音色が心に沁みました。ロシアのウクライナ侵攻で映画『ひまわり』が再上映されたりして話題になっていますね。以前から演奏されていた楽曲なのですか?

坂田 友人で日本チェルノブイリ連帯基金理事長でもあ



一九四五年広島県呉市生まれ。広島大学水畜産学部水産学科卒業。一九六九年「細胞分裂」結成。一九七二年「山下洋輔トリオ」に参加。一九八〇年「SAKATA TRIO」結成。以後「WHAHAL」「SAKATA SEXTET」「DA·DA·DA ORCHESTRA」「坂田明Mii」「坂田明&ちかもらち」「坂田明COCODA」などで活動。クラリネットを野崎剛史氏に師事。東京薬科大学生命科学部客員教授、広島大学大学院生物圏科学研究科客員教授(非常勤)。「どうでしょう?」「海」「SCENIC ZONE」「FISHERMAN'S COME」「枯れたひまわり」などCD作品多数。著書に「ジャズ西遊記」「瀬戸内の困ったガキ」「ミジンコ道楽」「私説ミジンコ大全」などがある。

る医師で作家の鎌田實さんと二〇〇五年にベラルーシを旅したとき、ゴメリという町の病院で演奏したのが最初です。「チェルノブイリ原発事故の六十キロメートル北にある被災地で暮らす人たちを撮った本橋成一監督の映画、『アレクセイと泉』に出てくる泉がある村も近い。ミジンコを観に行こうよ」という誘いに乗ってしまった(笑)。—坂田さんは無類のミジンコ好きなんですよね。そのお話はまたのちほど。広島県呉市で終戦の年の生まれ。幼少期は戦争の名残はまだありましたか?

坂田 戦争中は母のお腹の中にいた「戦腹派」です。広



映画「アレクセイと泉」の泉でミジンコを見ている坂田さん(手前)と鎌田實さん(奥)



2022年、蕨市立文化ホールくるで、坂田明COCODAの演奏。ピアノ・大森菜々さん、エレキベース・かわいしのぶさん、ドラムスは坂田さんの長男・学さん

の目の当たりにしていました。顔が全部ケロイドの人もいた。郷里が被爆地で、鎌田さんのご縁でチェルノブイリに行き、東日本大震災のあ

島の原爆は生後六か月のときで、その前は呉の大空襲に遭いました。

おふくろが僕をおぶって暗闇のなか防空壕に向かっていたとき、足を踏みはずして海に落ちた。たまたま干潮で砂浜に尻もちをついて助かったらしい。家は連合軍部隊の進駐基地の隣にあって軍隊の行進も見だし、朝鮮戦争のときには港に大型の揚陸艦「LST」が着岸していて、トレーラーで壊れた戦車や飛行機が船の中から出て来る

とは福島など東北でも演奏を続けている。そういう運命なのでしょ。

——どんな少年だったのでしょうか。

坂田 実家があったのは呉市街から山一つ越えたところ、かつては呉市電の終点だった、広長浜です。目の前は瀬戸内海の島々、背後は山という環境。東から西へと浜になっいて真ん中に小学校と中学校、東の端に親父の実家が十五年がかりで造った築港がありました。山側は住宅と段々畑で、小五のときに東の集落にあった家から築港に引っ越しました。さつま芋、麦、マクワウリ、トマト、ナス、キュウリ…畑仕事をして、夏は毎日海に飛び込んで遊んでいました。当時の瀬戸内海は豊かで、同級生と沖で魚釣りをしたり、ナマコを採ったり。浜辺を這っているタコを手でつかんだりもしました。

——夢のような時代ですね。

坂田 伝馬船遊びもお気に入り。小学六年生のときに親父が買ってくれたんです。底に水が入らないように自分で修理して、漕いで学校へ行っていましたよ。休憩時間は先生も一緒になって船に乗って遊んだりも。校庭の隣は海で、野球をしているとしゃちゅうボールが防波堤を越えて海に落ちこちたものです。